

かま・アイデアの器:バスケットー

■■復元ノートNo.1■■

●三内丸山遺跡縄文ポシェット：2012年10月

復元実験が行われた場所：三内丸山遺跡

研究団体：編み物研究会

素材：青森ヒバ

組織方法：織り編み

復元ノート：

■素材について：

青森ヒバ内樹皮は乾燥したものを水に浸けて柔らかくして剥がした。この地方には青森ヒバ内樹皮、またはヒノキ内樹皮で編んだかごがある。これらの素材の採取方法は現在あまり知られていない。立木から剥いだとの記述もあるが、素性のいい生の素材をそのままか、少し乾燥させて編めば皺が少ないのではないだろうか。

■編み組織について：

写真から以前に作られた復元かごとは少し違い、波のようにジグザグに動くあじろ編みと考えた。底もやや特殊なあじろである。

経、緯ともに同じ素材ではパターンがよくわからない。のでPPバンドの色を変えて編んでみたところ、だいぶ大きなサイズであるが明白になった。編む作業の前に予め色分けすることで編み目の方向などがよく確認でき、編み間違いも防ぐことができる。

■パターンについての疑問：

あじろのパターンはジグザグしているのだが、途中で山の位置を変えている。編み手が間違えたのか、意識的だったのか、もし意識的であったならば、どういう意図があったのか。または材が折れて山の位置を変えなければならなかったのか、面白いところです。

■素材からの検証：

柔らかい材で加工も容易である。そのため、長い材も準備できたであろう。それならば編み材の端を伸ばしてタテ材の1本とすることもできる。また、縁のしまつは材の柔らかさのおかげで、いろいろな方法が考えられたのでは。同様に側面の組織の目も詰めるのも容易だ。特殊な技術を特に要するものではなく、編み目の力が無くても編める。

■苦労したところ：

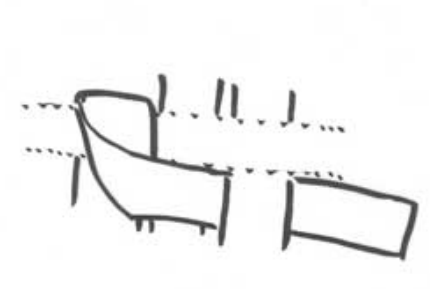
材がよれよれしてしまい、まっすぐ編むためにコントロールしなければならなかった。しかも剥ぐ時や編んでいる時についた折れ皺が目立つ。だいたい材の幅をどうやって整えたのか、私が編んだ材のようにハサミで整えなかっただろうし。

■縁：

縁は遺物を見ても決定的な証拠が無いが、研究者は外側にタテ材がくる方法と考えた。ただし、下の写真のようにタテ材が外側に全部出ている



というのも、使っている間に折れるだろうし、ということで右下図のような方法を考えてみた。他にもいろいろと考えられるだろう。民具ではタテ材を折って次のタテ材で巻く方法がある。図の方法では、重なったタテ材の厚みが出たが、遺物からはその痕跡はない。



■トライアル：
ヒノキ科であれば、ということでスギ内樹皮で編んでみた。
オリジナルよりは小さなサイズだ。
スギ内樹皮でも編めるが、青森ヒバの方がまだ柔らかい。
スギの方は折れてしまうと、完全に曲がるのでカクカクした線になる。
他にもヤナギの内樹皮で編んでみた、こちらの方が柔らかい。
スギ内樹皮ならきれいに編めるだろう。

■感じたこと：
この小さなかご（ポシェット）は腰に付けて何かを入れたものなんだろうか。民具ならば腰につけるために形を丸くしている。真四角というのはどうということなのか、また柔らかくはないので持ち歩くといっても、、、難しい。拾ったものを入れるのか、嗜好物か、種か、皆さんなら何をいれますか。